Interpreter Workshop

第３２号

府民の森
パークレンジャー
みどり生きものふれあい隊リーダー

マザーテレサ

パークレンジャー１２期　山崎智昭

先日、映画「マザーテレサ」を観ました。彼女は人種、宗教にかかわりなく傷つき、病んだ人々を受け入れました。子供達には青空教室を開き、貧しい人々のために食糧を調達し、死が近い病人、老人達には路上ではなく心安らかに死を迎えられるように家（ホスピス）を建てました。

活動を続けているうちに共に仕事をする神父やシスター、ボランティアが集まり、シスターテレサは彼女を慕う人々からいつしか「マザー」と呼ばれるようになりました。

マザーはハンセン氏病の人々や孤児達が暮らせる村づくりを行い、活動の輪は世界各地へ広がっていきます。

マザーは問題に直面した時はいつも「神が必要とするなら必要なお金は集まるし、事は切り抜けられる」と信じ、実際そのようになってきました。幼い頃世話をした子供が大人になってから恩義を返されることもあり、決して運や偶然だけではありませんでした。

シスター達の活動は毎日、早朝から深夜まで続き、長時間労働のゆえ体調を崩す人もいました。あるシスターは「これは仕事ではなく生き方なのです」と語っており、賃金労働の考え方では割り切れない、本気でこの活動に身を投じないとやっていけない厳しさがあります。

マザーテレサはかつてある貧しい老人から神の声を聞きました。それ以来「最も貧しい人々に仕える」と言う信念のもと活動の場を教会から路上へと移しました。マザーは生涯その信念を貫き通しました。現在ではマザーの意思を受け継ぐ人々が世界各地で活動を続けています。

奉仕をする人達は貧困者、病人、孤児達から必要とされ、自分の居場所が得られる充足感があるからこそ活動を続けられるのでしょう。私はこの奉仕をする人、奉仕を受ける人が共に支えあって生きている姿に人間のあるべき姿、原点があるのだと感じるのです。

宗　誠一

皆さんパークレンジャー活動を楽しんでますか、私は体調が良いことにハッスルし過ぎて生まれて初めて夏やせしています。お疲れの方は体調回復に努められ、皆さん今後のレンジャー活動を楽しんで頂きたいです。

近時、私の目止まった韓国と日本の諺をどうぞ読んでやって下さい。

（　韓国の諺　）

行く言葉が美しければ来る言葉も美しい。自分が口にする言葉が美しければ、相手から返って来る言葉も美しいと言う意味で、心を込めた言葉使いがお互いの理解を深め心の距離を近づける事を説いています。今日はこんな事を言われて酷い目に合った、あいつはとんでもないやつで酷い事をされたとします。それは自分が出した地表面を這うような低い波動に相手が同調し、喧嘩となっただけです。全ての責任は実は自分にあるのだと言う意味です。

（　良寛禅師のお話　）

良寛禅師が残した対人関係を良くする注意点として、「戒語」を書き残しています。その数３００、少し紹介します。

①　人と人の仲が悪くなるような事を言う。②　人が隠してる事を言う。③　傷つくような事を言う。④　恥をかかせるような事を言う。⑤　人が驚くような冗談を言う。⑥　見下したような事を言う。⑦　人を妬むような事を言う。⑧　戸惑わせるような事を言う。⑨　怒らせるような事を言う。⑩　相手を軽んじて冷たくあしらう。⑪　ご機嫌をとるような事を言う。⑫　些細な事を取り上げて言い立てる。⑬　正しい事を言ってるのに間違ってるかのように言う。⑭　話を途中で妨げる。⑮　とがめだてする。⑯　賞めるような言い方をしながら実はけなす。⑰　人の口調をまねる。

１２期パークレンジャー　　宗　誠一

歩　こ　う　！

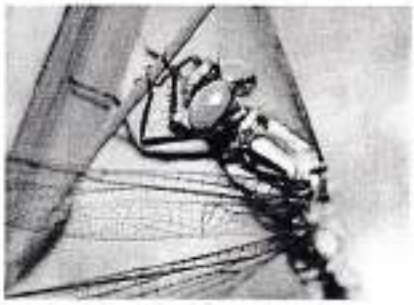
森の中を歩くのが楽しい。特に、むろいけの定例イベント『親子ＤＥシリーズ』の下見を兼ねて森の中をゆっくりと歩くのがとても楽しい。自然好きの『親子ＤＥ』担当の四人で自然観察会などの下見を（というと聞こえがいいのですが、実のところは日頃の勉強不足＆知識不足がばれて当日にボロがでない為に）「あーでもない、こーでもない」と言いながら図鑑を片手（両手かも？）に調べ、時には知っているものが教え、時にはわからないままであったり・・・。わからないなりに感動したり、ちょっとボケながらもそれなりに真面目な森歩きを楽しんでいます。

同じ道を歩いても四人で歩くと、一人で歩いた時は何を見ていたの？というぐらいに、あっちにもこっちにも“素敵な発見”が見つかります。それは、花や、昆虫、鳥、種子、実など小さな命であったり、香りや音や鳴き声であったりします。一人で歩くのと複数人で歩くのとでは目の数（情報量）が違うことはもちろん、一人一人の見方（目線や興味、関心といったもの）の違いの差が一番楽しいところです。一人で歩いていても見つけることができないものや、興味のなかったものにも触れることができ、とても刺激になり、勉強にもなります。

日々の活動でイベントに追われてしまうと、イベントをこなすことだけに必死になり、私たちはインタープリテーション（＝通訳・伝えること）をするための一つの手段としてイベントをやっていることを忘れがちになり『イベント屋』に陥ってしまうことが多々あります。そんな時に森を歩いて“素敵な発見”をすると、インタープリテーションの大切さをあらためて感じることができるのです。

森を歩いて「何もない普通の森」に見えるのか、「いろいろなものに満ち溢れた素敵な森」に見えるのか、それは人それぞれの感じ方次第です。ただ私たちレンジャーはビジターの皆さんに、何気なく素通りしてしまいがちな森（自然）の興味を持ってもらうことが自然へのアプローチへの第一歩かなと思います。私はそれを伝えることがレンジャーの価値ではないかと思っています。

森を歩くのが好きな人がいれば、
私たちと一緒に歩きませんか。



かなざき　ひろたか

パークレンジャー4年生になって

北部班　奥田浩司

府民の森パークレンジャーに登録して３年半の月日が流れた。たったの３年半だが・・・、僕自身は活発なレンジャーとはいえなかったが、でも、パークレンジャーは、、、変わった。

１年目は別のボランティア団体で主に活動してきたため、活動らしい活動はほとんど何もしていない。応募した動機も、当時は関東から大阪へ戻ってきて間もなかったこともあり、人間関係を作りたくてとにかくあちこちに顔を出していた、その延長でしかなかった。ただ里山風景に囲まれたフィールドの魅力は何ものにも変えがたい魅力があり、それに加え、パークレンジャーという組織、制度には磨かれていない原石のような魅かれる何かを感じた。と、同時に一方で、あまりに未成熟な危うさみたいなものを感じたのも事実だ。次の年から、僕の主活動現場が、パークレンジャーへシフトしていった理由は、この「あやういけど、ここはこれからゼッタイよくなっていく！」という直感が大きかった。

２年目、僕としては、自分で言うのも何だが、一番頑張った年だったと思う。会議の場では度々辛辣な発言を繰り返したし、ＩＰＷＳにもかなり厳しい意見を載せた。公社に対しても、ボランティア活動や自然体験活動の基礎・土台になるものが何なのかという様々な投げかけを直接行なって、嫌われ役も買って出たし、一方でパークレンジャーとしてできること、すぐにとりかかれることを自分なりに整理して、それまでパークレンジャーがやろうとしていなかったことを色々と手掛けた。また少しでも現場に埋れている資源を発見できればという思いで、くろんど園地を年間通じてくまなく歩き、通い続けた。今思えば、すべてが先の見えない実験みたいなものだったのに、当時の北部班のメンバーは一緒に汗水を流してくれたし、公社からも様々な面で試行錯誤しながら、パークレンジャーを共に活性化していこうという姿勢が感じとれるようになってきた。「やれば、できる！」 僕はやる気のある仲間たちとともに確信した。ただ、まだこの頃の実情は思ったように人も集まらず、意欲だけが先走りして空回りしていた感は否めなかったと思う。長いトンネルを抜け出し、確信が実感に変わったのは、この年の最後に初めての試みとして行なったパークレンジャー入門講座にたくさんの人たちと知り合った時だった。

３年目は北部班の活動が一気に開花した年だ。武田さんがリーダーになってからというもの、くすぶっていた種が芽を出し、あれよあれよという間に成長して、一気に大きく花が開いた。最初の頃は混乱もあったものの、武田さんのリーダーシップ、公社のバックアップ体制の充実に加え、新しく入ってきた個性的で様々な得意分野を持つ１２期のメンバーが今までのパークレンジャーが持っていなかった新しい色を注入し、前年度「輝く未来のパークレンジャー活動」を夢見て、共に頑張ってきた１１期以前のメンバーとの息がうまく噛み合い、数が揃ってようやく定期的な活動ができるようになっただけでなく、それまでのみんなの思いが一気にカタチとして表現できるようになった。メンバーそれぞれが、自分にできることは何なのかを考えるようになり、みんなで支えあっていける横のつながりが強い組織の基礎ができたのが、この年だった。

４年目になって、僕はもう、自分で楽しんでいるだけで、実質ほとんど何もしていないんだけれども、パークレンジャー全体として大きく変わったことはやはり何といっても若い人がたくさん入り、しかも定着していることだ。この数年のパークレンジャーという組織は（僕自身にもかなり責任はあったと自覚しているが）、どちらかというと敷居が高い、若い人が定着しにくい空気があったと思う。特定の人物が仕切り屋になっていて、いろんなことを教えてくれるのは、くれるんだが（それは、こうすべき、こうせねば、という説教っぽい一面ももって

いて)、若い人たちから見れば、自分の言いたいことが言いにくい空気が何となく蔓延していないこともなかったと思う。実際、昨年までの会議は「単なる放言の場、公社とレンジャーがお互いの立場を主張するだけの場」といった様相があり、あの会議(?)に参加して、「これからレンジャーを継続していこう」という気分になれる新しい人(特に若い人)はいなかっただろうとさえ思う。「基本的な理念とルール」に忠実でさえあれば、すべてのメンバーがフラットであるはずのボランティア団体に、こういう空気だけは持ち込んではいけないと思う。何より、この空気こそが、新しい人が育たないだけでなく、自律的に動けない指示待ち人間を生み出す温床になる。パークレンジャー活動が全く盛り上がっていなかった1年目に公社が行なったアンケートで、僕は「理想のボランティア団体は多様な性別・年齢・趣向・立場がほどよく均衡しているメンバーから構成されていること」という意見を述べた。その当時、7期までの「レンジャーは30歳以下」という体制が、8期から急に年齢制限が取り払われ(僕は10期なのでそのあたりの事情はよくわからないのだが)、7期以前のレンジャーとしての経験を積んだ比較的若い人たちと8期以後のレンジャー経験の浅いシニアが交錯して噛み合わず、組織が混乱していた時期だったこともあり、「多様な年齢層がきてまとまりにくい」という意見がでていたが、僕はそうは思わなかった。本当に強い組織というのは様々な価値観を受け入れている多様性のある組織だと思う。いろんな人間がいて、それがそれぞれに自分の強みを発揮できうる空気を失わない組織だと思う。今の北部班の強さは「多様性」そのものだと思う。小さい花や大きな花、ひとつとして同じものはないけど、みんなが特別なオンリーワン、「世界でひとつだけの花」が描く世界ってとても素敵だと、僕は思います。

5年目以後―どうなっていくんだろう。僕はこの3年半のパークレンジャー活動の中で、多くのことを発見し、多くのことを吸収し、これからの僕の財産になることをたくさん得たが、何よりも「チームワークとは何なのか」というかけがえのないことをレンジャー活動を通じて知り合った多くの素晴しい仲間たちから、実体験として、学んだことはとても大きい。特にこの2年間に行なわれた4回のキャンプイベントはまさにチームワークの賜物だったと思う。いくつかの団体で主催側の立場でキャンプに関わったことのある僕も、終わった後、こんなにさわやかな気分になれて、充実感でいっぱいになったキャンプは、少なくとも社会人になってからの20年間では体験したことがなかったとさえ思う。プロの行なうキャンプに比べれば、キャンプ場の条件もよいとは言えないし、未熟な部分も多くソフトとしても完璧なキャンプとは決して言えなかったけれど、でも参加した人たちに与えた影響は決して小さくはないし、内容的にもひけをとらない素晴らしいものだったと思っている。何よりパークレンジャーが懸命に楽しさを共有しようとしているひたむきさだけは、おとな・こどもを問わず伝わったと確信している。きっとこれから私たちを取り囲む環境も社会情勢も変わっていくだろう。ひょっとしたらもっと、もっと個人志向や競争原理が強まり、共同体験や絆や人と人とのつながりといった言葉が失われていくのかもしれない。そしてメンバーにも様々な人生があるから、ずっと永遠にパークレンジャーでいることはできないかもしれない。ただ辞めた後も「パークレンジャーでいて、本当によかったぁ!」と心から思えるような組織であり続けたいと思う。また、新しく入ってきた人に、自分の持ち味を受け入れてくれると楽しいチームだなあと思ってもらえるような組織であり続けたいと思う。また出産や子育てや転勤や人生の中で訪れる様々な事情から、一度レンジャーから離れた人でも、再び活動できる状況になれば、違和感なくすっと戻ってこれるような組織であり続けたいと思う。そしてできれば、キャンプや様々なイベントに参加し、影響を受けたこどもたちが18才になったらどんどんパークレンジャーに志願応募してくる、そんな組織でありたいと思います。

パークレンジャーの未来がますます輝きますように!

裸族に逢いたくて・・・

5期　中村孝子

皆さんは、「コテカ」をご存知でしょうか？

ある漫画の本によると「世にも珍しい男性用下着」といわれているものです。いわゆる裸族が着けているものです。ウルルン滞在記か何かで見たことがあったのですが、実際にこの「コテカ」がどのように使われているかを見たくて、この 8 月にパプアに行って参りました。

パプアというとどうしても「パプアニューギニア」を思い浮かべる方が多いようですが、私が行ってきたのは、インドネシア領のパプア（旧イリアンジャヤ）です。ニューギニア島の東側がパプアニューギニアで、西側はインドネシア領のパプアになっています。西側の方が治安がいいと聞いていたので、そちらの方へ行きました。パプアというと、果てしなく遠いイメージがありますが、地図を見るとわかるように、オーストラリアに行くよりも近い位置にあります。ただし、バリ経由で行くことになるので、随分遠回りをすることになります。　バリ　→　ジャヤプラ　→　ワメナ

実は 4 年前にもパプア（当時のイリアンジャヤ）に行こうと飛行機のチケットもとっていたのですが、情勢不安定ということで、キャンセルさせられ、泣く泣く諦めた事があったのですが、今回ようやく念願が叶いました。

パプアを訪れる日本人は 1 年間で 100 人程度と聞いています。パプアのツアーというのはあまり見たことがありませんね。もちろん私は一人で行って来ました。10 日間程の滞在でしたが、1 年間で 100 人という割合から考えても、日本人にはほとんど会いませんでした。

・・・

と今回、旅行でとった写真もまじえて、旅行記風にしようと思っていたのですが、パソコンをうまく使いこなせなくて、断念しました。「コテカ」と「パプア」に興味をもたれた方、いらっしゃいましたら、中村までご連絡下さい。実物のコテカ（使用前）とコテカを着けている裸族の写真ならお見せすることができます。又次回にこの続きを投稿する予定です。

初心者向けのバードウォッチング　in　むろいけ

来年もむろいけでバードウォッチングのイベントを行ないます。
ここ数年、「初心者向け」という形で行なってきています。今回も「親子 DE 自然観察　誰にでもできるバードウォッチング」～初心者対象のわかりやすいバードウォッチングです～ とコメントをつけての参加者募集です。
昨年度、今年2月には私がアタマをとらせてもらって実行しましたが、かなり久し振りに進行役として前に立ったこともあり、緊張と思いだけが空回りして言わなければいけないことはすっ飛んでしまうし、ボロボロだったなーと反省することしきりです。そんな痛い思いの残るバードウォッチングですが、今回のヘッドは未定。さて、どういう形での進行になるのでしょうか。

9月19日の箕面での研修では主に鳥の食物について語られていました。エゴノキにはヤマガラ、イロハモミジにはアトリ…etc. 「よっしゃ、次回は花めく広場の木の近くで待ち伏せしてみよう」と思ったりして。研修の時にはほとんど鳥の姿は確認できませんでしたが、サンコウチョウの珍しい子育ての映像を見ただけでもインパクトがありました。しかしイベントで実際に鳥たちの姿が見えないと、生き物だから仕方がないと思いつつもちょこっと焦ります。

鳥の動きは早い、双眼鏡を使い慣れていない、鳥の声も聞き逃しやすい、とくに鳥に興味があるわけでもなく参加した、そんなこども達だけでなく親達にも何かしらイベントの中で「へ～」とか「おっ?!」と思ってもらいたいと思っています。幸い今までのところ、カモ類などの水鳥は毎回見ることができているのですが、姿が見えないときの仕掛け？もまた考えないといけません。
前回は鳥の羽を数枚用意してネイチャースコープで覗いてみました。それと鳥の足跡の写真とはやにえされたカエルの写真。もちろん同じものをまた次回も使用してもいいのでしょうけれど、何か新しい切り口は無いものかと思案中です。
百聞は一見にしかず、見たものに感じてもらえることが一番なのでしょうけれど、それだけでなくなんらかの仕掛けをきっかけとして、鳥への興味と関心を持ってもらえたらなぁと思っています。

毎年恒例？の「初心者向けバードウォッチング」ではありますが、毎回がいろんなチャレンジです。ネタ探しは続きます。

西出　明子

樹木物語

９期　荒川　雅夫

～その五～　「　杉　」

スギ科は、中国、日本、アメリカ、メキシコなど１０種ほどありますが、スギは日本にしかありません。スギ科の中で木材として重視されているのはスギだけです。スギは成長がよい場合には６０年、高さ３０㍍にもなります。また長生きして非常に大きくなります。

幹は著しくまっすぐで大変大きくなり、軽い割に強く、耐久性が強い木材を作ります。また、縦に割れやすく、登呂遺跡にみられるように農業土木用にスギの板材が使われていたし、建物には柱から板まで使われています。また、スギ材は装飾的で内装材として使われています。

スギ材はかつて酒樽に使われるほど日本酒との関係も深く、今でも酒屋の目印にスギの葉を束ねたスギ玉を使う習慣が残っており、興味深い。スギ材の独特の香りがその樽の中で造られる間に移り、その風味を増した。これを木香と呼んでいた。今日ではスギの酒樽が使われることは少なくなった。

スギは真っ直ぐ伸びる素直な「直木（すぐき）」ないし「進木（すぎ）」の意といわれる。本州では太平洋側のオモテスギに対して日本海側のものはウラスギとよばれる。ウラスギは葉が強く、内側に湾曲し、樹冠が尖り、下枝が垂れるというように雪を落としやすい形をとる。そして下枝が地に着くと、そこから無性繁殖して新株をつくる。こうした独特の繁殖の仕方は「伏条更新」といわれる。

スギは日本で一番多く植えられた木です。柱や板など建築材に使われ、販路もあったので植えられ、今では森林の約１６％を占めている。毎年春先には国民病ともなった花粉症の犯人とされていますが古くからスギのあった地方でも近年まで花粉症は発症していません。花粉症の本当の原因はディーゼルエンジンの排気ガスに含まれる微粒粉塵などと複合したものといわれますが解明されていませんからスギには迷惑なことです。

～その六～　　「　神話から植林　」

『日本書紀』の「一書二日ク」には、スサノオノミコト自身が樹木創造の神様であったといわれている。　ーースサノオノミコトがおっしゃるには、韓郷（からくに）の島には黄金とか白金とかがある。これに反して我が子孫が支配する国には“浮く宝”がなくてはなるまい。とおっしゃって髭からは杉の木を、胸毛からは檜を、尻の毛から槙の木を、眉毛から樟をお作りになり、それぞれの用途までお定めになりました。すなわち、杉と樟の２種類の木は造船に、檜は瑞宮（みずのみや＝宮殿、神殿）に、槙は一般人民の寝床（一般に寝棺）に用いるようにしたらよいであろう。それからの世の人たちがその果実や葉を喰らうことができるたくさんの種類の樹木をもお植え下さった。ーー

日本人は世界の奇跡を行った民族ということである。木を植える文化を育ててきたということだ。ヨーロッパをはじめ、世界の他の国々では森林を破壊することで文化を築いてきた。これに対して日本は森林を育てることで文化を養ってきた、ほとんど唯一の文明国であった。

木を伐ってまた植える。これは重要なことである。伐りっぱなしにして自然を略奪するのではなく、また手を触れず放置して自然に背を向けるのでもない。木を伐っては植える行為は木が生長してまた、土になり、さらに次の命をはぐくむという自然の輪廻に人間も進んで参加するということである。そしてこれこそ世界の中でおそらく日本人だけが太古から養い、続けてきた自然とのつきあい方であり、これこそはこの日本列島が世界の奇跡ともいうべき今日まで世界有数の森林国として維持されてきた秘密でもあった。

CO日下が勝手に選んだ・・

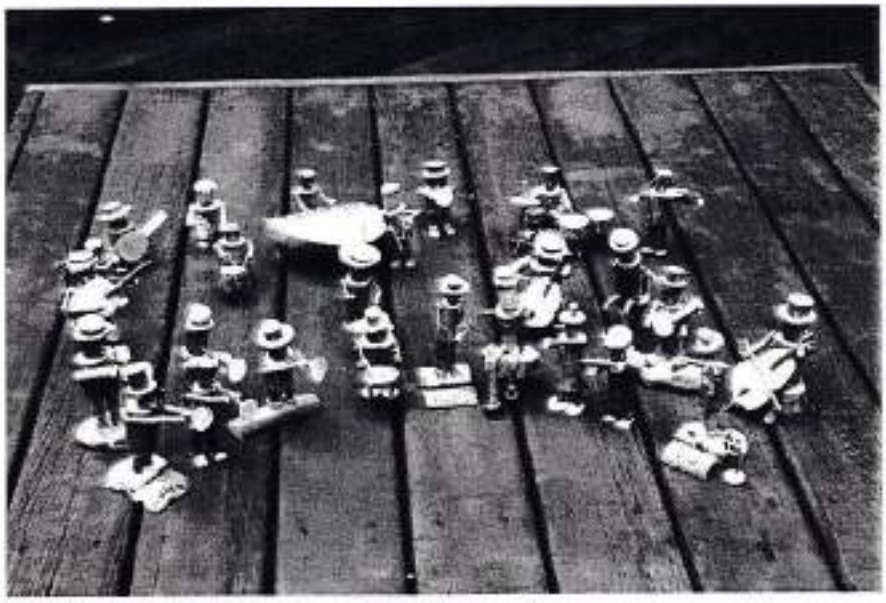
１７年度上半期ベストショットランキング！！

ヒト・モノ・場所問わず、あくまで日下が完全に主観で選んだランキングです。苦情は一切受け付けません！

第１位

森の音楽隊（８／１４　小枝のクラフトより）

つい最近の写真です。金崎さんに頂きました。自由に楽器で選んで作れる、凝ってるわりには簡単に作れるというのもポイントが高かったです。



第２位

こもれび（８／７　こどもたちだけのキャンプより）

森に日が差し込んでいるのがすごくよく分かる写真です。お気に入りの１枚です。

第3位

野ウサギ（箕面V.Cより）

野生のウサギです。かわいい！木山所長は圃地を歩かれる際には必ずカメラを持っていかれます。その毎日の心がけがシャッターチャンスに結びつくのでしょうね。継続は千カラなり！

第4位

リアル料理（5／15　むろい叶研修より）

木の根っこを豚の丸焼きに見立てた料理なのですが・・・。神様が力を貸したとしか思えません。

第5位

うんこ大人気！（4／24　ちはや研修より）

路の途中にあったなにかのフンにみんな興味深々！写真を撮ったり、分解したり・・・。かつてこんなにうんこが人気になったことがあるでしょうか！食事中の方すいません。

惜しくもランキング外となってしまった写真たち

なかなか笑ってくれない子がやっと見せてくれた笑顔

ヤマガラのヒナです。かわいい！

おさるです。サルも木から落ちるを再現したかったのですが・・・

「ティピー」

北部班　武田敏文

今年もくろんど園地恒例の「子供だけのキャンプ」が８月６～ ７日にかけて催されました。参加者は小学生４０名、スタッフはレンジャー・公社合わせて２０名近くとなり、総勢６０名のビッグキャンプとなりました。中島キャンプデレクターの下、１３期の若いレンジャーが各班のリーダーとなって子供達をリード、旧レンジャーは裏方でサポートに回って新・旧の迷(?)コンビで大変盛り上がったものとなりました。そして今年もキャンプのテーマは”冒険に挑戦”という事で色々なプログラムが用意されました。１日目のメインプログラムは４つの班に分かれて「ティピー」作り、２日目は「木登り」をメインにして、「ハンモック」、「２本ロープの綱渡り」、「竹馬」、「竹のコッポリ」等。子供たちは暑さにもめげず、自然の中で元気に挑戦してくれました。あとの振り返りでは、一泊二日では時間が少な過ぎるとの声も上がり、又来年も来るという子が何人もいて名残惜しいものとなりました。

さてここでは「ティピー」とはいかなるものか、そして園地の材料を利用して、何時でもできるティピーの作り方を紹介したいと思います。皆さんの園地プログラムでも作ってみて頂ければ幸いです。人は自然の中の材料で住まい作ってきたこと、それを作る共同作業を通じて仲間を理解することなど…、日帰りプログラムにも応用可能だと思います。

「ティピー」とは北米インディアンが使用していた住居のことですが、西部劇をご覧になった方はご存知かと思いますが、あの底面が円形で頂点に向ってとがった形の円錐形の移動式簡易住居のことなのです。　ティピーは英語で「tipi」「tepee」などと表記されますが、ティピーは辞典では「テント小屋／インディアンの獣皮製住宅」という意味で説明されています。インディアンの言葉では、ティピーの”ティ”は「住む」、”ピ”は「使う」という語源があるそうです。「住むために使用する」つまりティピーとは、インディアンにとって本当の意味での家そのものなのです。

作るのは至って簡単。基本的な材料としては竹とロープ、それに屋根を葺く材料として竹の笹やヒノキの枝葉があれば十分です。次のページに構造と、作り方の順序を写真で示しています。(写真はなかじぃ提供)　今回のこどもキャンプでは、屋根を葺く材料として竹の支柱を切り出した後の枝を払ったあとの笹を用いました。　尚、４基のティピーの屋根を仕上げるには竹笹が足りないので、ヨシズを補助材料として用いましたが、園地でヒノキの下枝の払ったものが調達が可能であれば、より本格的なティピーが作れるくものと思います。作った後、ティピーの中で何をするかは皆さんでアイデア考えて見てください。

ところで、今年のプログラムに「ティピー」のアイデアを持ち込んだのは、なかじぃ。昨年に続いてユニークなアイデアには何時も脱帽です。普段の園地活動で現場を見て何が出来るかアイデアを出し、そのアイデアを本当に実現してしまうのが北部班の凄さです。場所を何処にする? 材料はどうする?　安全性は? 時間は? 作り方を確認していく富さん、全体段取りを見る南さん、腹さえ減らなければ動いてくれる宗さん… 徹底した下見で納得いくまで確認をして行くのが北部班のポリシー。キャンプ本番を含めると３週連続の園地通い。暑くてしんどいけど、下見の夜にはホタルが見られたり、神秘的なセミの羽化が見られるなど、感動的な瞬間に出会えたりで疲れも吹っ飛んでしまいました。(でもキャンプ本番の後、僕は体力が回復するのに１ヶ月くらいかかってしまいました・・・・)

「ティピーの作り方」

① 支柱となる竹約3 m(径3φ～4φ)を
６本用意し、並べて上端から30cm
程の位置をロープで束ねる(根元は
地面に打込むので尖らせておく)

② 竹の支柱を立て、地面に各辺が
1.2m～1.5m位になるように広げて
位置を決める

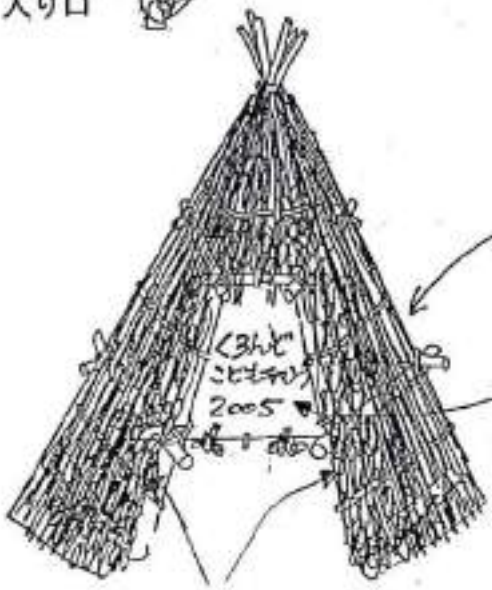
③ 上下二ヶ所の位置に竹の桟を入
れ、各辺を固定しする。　又の竹
桟の上下間はロープで固定して行
く

ロープで縛っていく

竹の横桟で固定

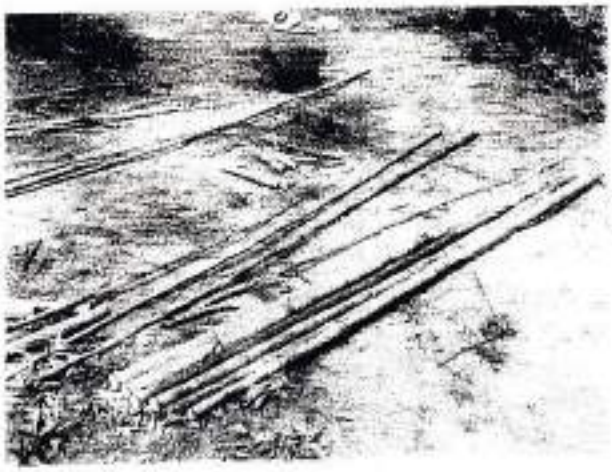
入り口

④ 竹笹や木の枝葉(ヒノキ等)で屋根
を葺いていく。 今回はヨシズを一
部使用。

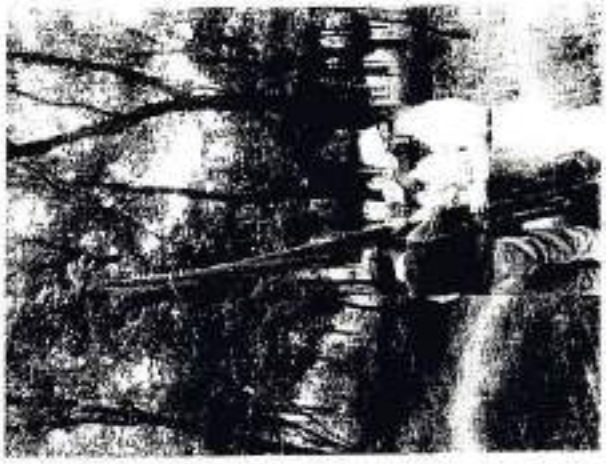


竹ザサや木の葉で屋根をし上げる

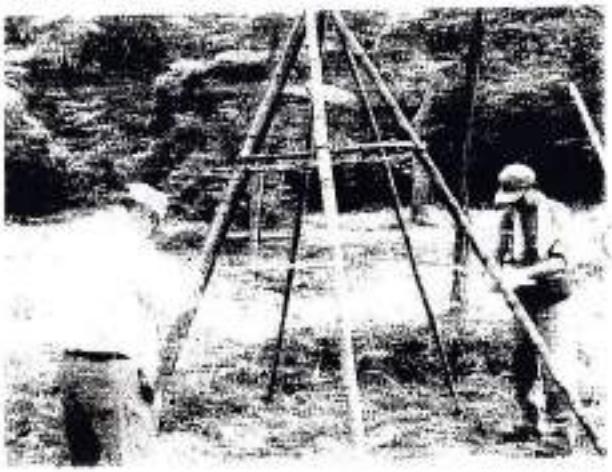
「ティピー作成過程」



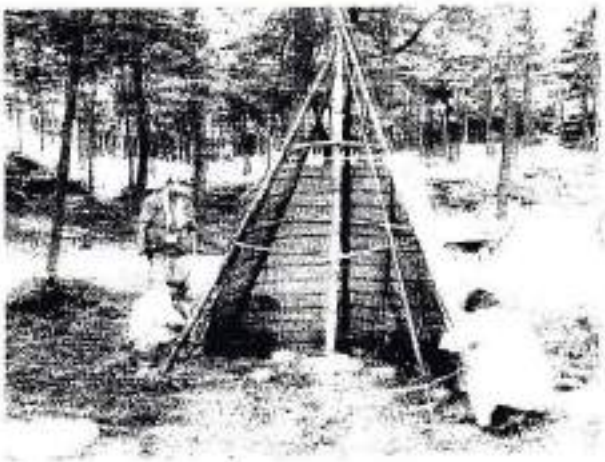
①



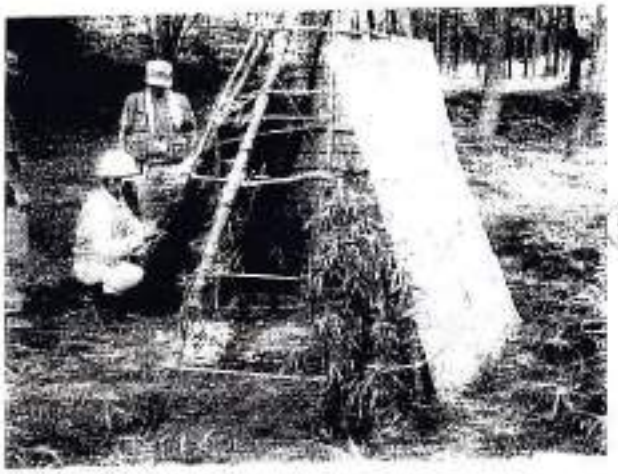
②



③

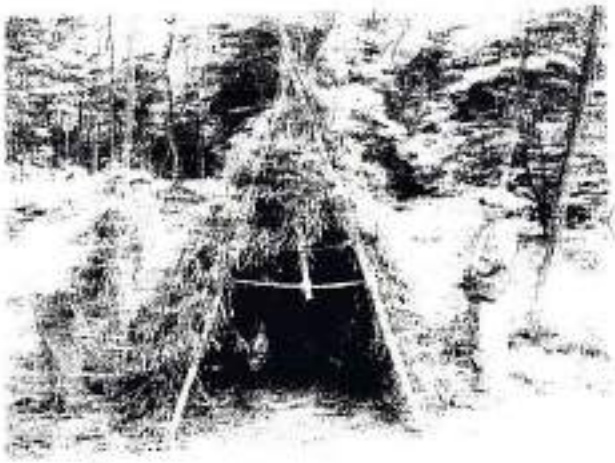


④



⑤

⑥



⑦

⑧

ガイドウォークのネタ探し

12期　PR　峻　　亘

1. ガイドウォークで大切なこと

PRになって 2 年目、北部班ではガイドウォークに力を入れ始めた。ガイドウォークはお客さんを連れて園地を案内するわけであるが、その内容はやはり自然解説が主体である。お客さんを案内して自然の不思議さ、面白さを解説して楽しんで貰い、満足して頂くことが狙いである。そのためには自然に対する深い知識と分かり易く表現する技術が大切だと感じており、日頃から面白いネタ探しに励んでいる。最近の事例をいくつか紹介する。

2. 幸運を呼ぶ四葉のクローバー

シロツメクサという名前を知らない人でもクローバーといえばまず知らない人はいない。葉はほとんどが三葉、希に四葉のものがあり、幸福のシンボルといわれ非常に珍重される。数年前、検診で胃の不具合が見つかり手術をしたが、入院前に或る人から四葉のクローバーの葉を頂きすごく感激したことがある。病院の近くに淀川があり、手術後、療養中に淀川の河原に行き、四葉のクローバーを探したが 1 日で 1000 枚程度観察した結果、3 枚見つけた記憶がある。品質管理で使う正規分布の 3σ（シグマ）限界外の確率であり稀有な出現率である。その後、別の場所で探したが 1 枚も見つけていない。

さらにいえば、五葉、六葉のクローバーまで見つかっているらしい。発生確率はさらに小さくなり六葉で 6σ 限界外（百万に 3 つ＝3PPM）位であろうか？

さて、シロツメクサの名前の由来であるが、私は白爪草とばかり思っていた。江戸時代、オランダから日本にガラスの器が献上され、その梱包の緩衝材としてこの野草の幹草が使われており、その後帰化した野草だったとのこと。以上のことから白い花の咲く詰草、「白詰草」となったのである。

3. 不思議なカタバミ

カタバミといえば市街地にも生える野草であるが、くろんど・星田両園地には少ない。ガイドウォークで小学校低学年以下の子供がいる時、この野草があると子供向き解説が苦手な私はほっとする。カタバミの葉で 10 円硬貨を磨かせてピカピカになるととても喜んでくれるからである。この葉には蓚酸が含まれており、昔は銅鏡や仏具を磨くのに使用したらしい。噛むと酸っぱい味がし、別名をほうずき草ともいう。

さて、和名のカタバミの由来だが、3 枚のハート形の葉が昼間は水平に開いているのに夜になると閉じて葉が欠けているように見えるから片食み、傍食みということらしい。ネムノキは羽状複葉の葉が葉軸を中心に両側の小葉が下向きに閉じることを蛍キャンプの時に確認したが、カタバミはどのように閉じるのだろうか？

近くの遊歩道の草むらへ懐中電灯を持って確認しに行った。結果はネムノキより遥かに芸術的な閉じ方であった。下の写真で分かるように上から見るとまるでペンツのマークである。

昼間のカタバミの葉

夜間のカタバミの葉

4. メラノキシロンアカシア＝相思樹？

星田園地にはメラノキシロンアカシアという一風変わった木がある。というのは、羽状複葉と平行脈の単葉が一緒についているのである。去年の11月に初めて見たのだが、ほぼ同時期に、自然大学で、同じ構造のソウシジュという木があるということを聞いたので早速インターネットで調べてみた。

その結果、下表のようなことがわかった。

項目	メラノキシロンアカシア	ソウシジュ
学名	*Acasia melanoxylon*	*Acasia confsa*
科・属	マメ科アカシア属	マメ科？属
漢名	なし	相思樹
原産地	オーストラリア	台湾・フィリピン
花	白色の球状	黄色の球状

メラノキシロンアカシア

学名が違うので別種には間違いない。ソウシジュは実物を見たことがないので断定はできないが、花の色が違う以外は、ほとんど構造は同じと思われる。アザミなどで地名が前につく別種のものがあるがその類のものではないかと推測した。

今後ソウシジュの現物も見てさらに明確にしたいと思っているが、今のままでもガイドウォークの目玉には十分使える。ソウシジュは漢名が「相思樹」で平行脈の単葉を両側から引っ張っても中々切れないからだというロマンチックな名前の由来があるそうだ。鉄や黄銅の圧延板を曲げるときはロール目と同じ方向に曲げると折損する現役時代のトラブルを思い出す。メラノキシロンの単葉も引っ張っても切れ難いのでこの話はガイドウォークのネタに頂戴している。

5. 自然の芸術ポットホール

くろんど園地には多くのポットホールがある。ＰＲになった当時から先輩ＰＲにポットホールのことは聞いていたが、月輪の滝の下の岩のくぼみがそれであるとずっと信じていた。大したものではないなと思っていたが、今年の蛍キャンプの下見で水舞台近くの小川に連れて行って貰い、初めて本物を見ることができて仰天した。約10mの距離に岩盤が水に削られ、水路や大きな水瓶状の穴がいくつか見ることができる。小川が小さくて、すぐ傍を歩いていても、教えてもらわなければ誰も気がつかない代物である。大きな穴は直径、深さとも40ｃｍはある。説明を聞くと水に流れてきた小石が岩盤のくぼみに入って渦巻きを起こし岩を削ってできたものとのこと。地学の専門家の話では１年に0．何mmという速度で、１０００年位かかってできたものだそうだ。この小さな小川の緩やかな流れであんなものができたとはとても信じられない。自然大学の仲間に見せた時の「削られたのではなく化学的に溶けてできたのではないか」という意見も反論しきれない。謎である。信じるものは救われる。見ただけで誰もが驚くガイドの目玉としてはうってつけである。このポットホール、実はここだけでなく、そよ風の道、さわわたりの道にもあった。どちらも規模が小さいが、そよ風の道のものは人がほとんど入って来ないところにあり箱庭風で水の音も癒しの効果がありそう。最近、日本古来の癒しの仕掛け「水琴窟」が話題になっているがそれに通じるものがあるような気がする。

6. 終わりに

以上、4事例を述べたが、ものの名前を覚える段階から一歩進んで、少し深堀できるようになった気がして一人悦に入っている。常に問題意識を持って、何度も何度も現場に出向き、現物をよく見ることが必要であることが漸く理解できるようになった。現場・現物主義。これも仕事と同じである。このように考えればいくらでもネタが作れるような気がして楽しい。さらに質の向上も図りたい。

中部班の自主研修を終えて

１２期　　椋田房子

我が中部班には、沢山の宝物が落ちている事を実感した研修でした。

信貴生駒スカイラインで東大阪市立野外活動センターへ行く途中ぬかた園地の頂上で観た夜景は『ダイヤモンドパノラマハイク』。夜の昆虫採集では、『虫博士になろう』。虫をスケッチしたあと図鑑で調べる。翌朝の散歩ではしぎぞう虫の落とした小枝の先の実、綺麗な花のわりに臭いくさぎの木、ぬるで・つたうるし・いわがらみの違い、蛾のまゆ等々『驚き・楽しいガイドウォーク』。笹などから作るお茶は、『野草で茶・茶・茶』。なるかわ園地からぬかた園地の途中の『つつじハイク』。ぼくらの広場での『バッタの運動会』葉っぱをこすりだししたり、くっつき虫の不思議を観察したりして『草むらで遊ぼう』。このドット・イベントを繋げて、野外活動センターで泊まるのも、実のあるものになると思いました。センターでは火が使えるので夜のなどにはキャンプファイヤーも企画できますし・・。

もう数え上げたらきりがないほど沢山のイベントが浮かびました。時間に制約されず、気持ちもリラックスして多くのアイディアが浮かんだ今回の研修会は、実に有意義なものでした。

感動の分かち合い

先日、イベントの下見中にくもの巣を見つけました。くもの巣を形成しているくもの糸って縦糸はつるつる、横糸はねちゃねちゃしてるんですね。その時、先輩レンジャーに教えてもらって初めて知り、私は改めて自然の精度の高さに「すごい！」と感心しました。イベント本番、もちろんこの感動を参加者にも！っと思ったのですが反応はいまひとつ。「気持ち悪いから触りたくない～」とまでいわれる始末でした。感動を分かち合うって難しいですね。話の持っていき方や言い方もとても重要なんだということを実感しました。知識を伝えることとは別物のようです。

感動には理論や理屈なんかでは太刀打ちできないような大きな力がある、と思っているので、できるだけたくさんの「すごい！」を、自然を通して、できるだけたくさんの人と楽しく分かち合っていきたいです。せっかくその機会をいただいているのですから、無駄にしないよう、その方法をこれからも楽しんで模索していきます。

13期　宗里　雅世

ふれあい隊

曽野　繁美
その　しげみ

17年度は、裏面のビジターセンターにて、巣箱の観察に始まり、くろんど園地でのキャンプ、むろいけ園地にて、小枝のクラフトをさせてもらったり…と、楽しんで活動しています。　オカリナもがんばろうと思っております。　みなさん、今後ともよろしくお願い致します。

13期 広山 司

・今年からPRに参加しました。現在は北部理科に所属しています。

・自然がすきで、いろんな人にこの楽しさをしってもらいたいと思い参加しました。

・特にきのこが好きで、これから秋にはえるおもしろいきのこを少し紹介したいと思います。

よろしく
おねがいします。

～オニフスベ～

・大きいものはバレーボールくらいにまでなります。

・見た目はこれがお豆にきのこがというくらいの大きさでびっくりします。

・今年の9/7に私が家からほしだ団地へ向かう山道のわきやぶ内にも発生していました

直径
20～50cmくらいです。

中には胞子がつまっています。可食

～カニノツメ～

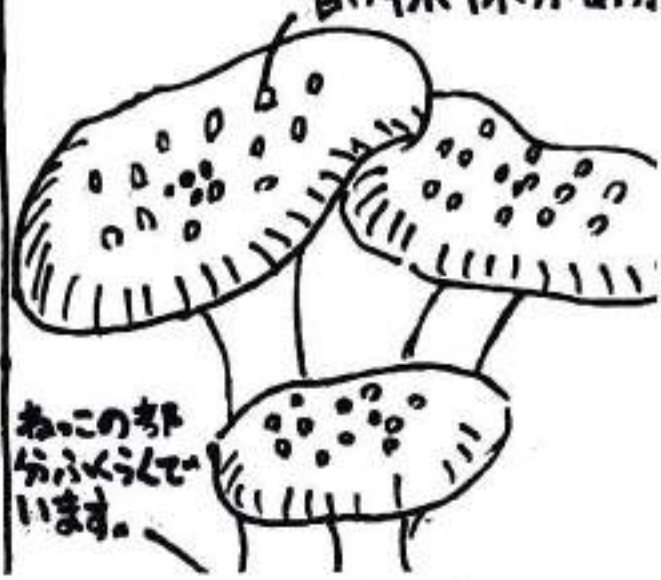
・カニのツメのような形、色をしたきのこです。

・中心の黒い胞子を作る部分はとてもくさいです。

～テングタケ～

・夏～秋に山道でふつうにみかけることのできるきのこです。

・有毒です。このきのこのなかまは毒に強毒が多いです。



初めまして。宮城恵と申します。なかなかパークレンジャーに参加できてませんが、今後はもっと参加していきたいと思います！
趣味は動物園に行くこと☆ロービング☆自転車で散歩☆写真撮影などなどです☆
♪私の活動♪
夏はキャンプリーダーとして山や海など色々なフィールドのキャンプに参加していました☆最近は、ラフティング・シャワークライミングに参加しました。今後は川にも進出して行きたいと思っています☆
どうぞよろしくお願いします(^O^)

今年の春にレンジャーとなって早くも半年が過ぎようとしています。
この間に出来たことといえば・・・。なにかあったかなぁ・・・。
なにも出来なかったなぁ・・・。と、言うのが正直なところです。
でも、研修会や園地でのイベントのお手伝い等、自分自身のスキルアップになるようにできるだけ参加してきたつもりです。
そして早くそれらを生かして一般参加者の人達と園地を楽しむことができたら素晴らしいなと思っています。そのためには公社の方や他のレンジャーの方とも連絡を取り合って協力していかなければならないと思っています。
みなさん、よろしくお願いします。
さて、私自身これから楽しみなレンジャー活動ですが気になっていることがあります。
それは「樹を切る」というようなイベントです。間伐体験や剪定がこれにあたるのですが
切ることが重視されてなぜ、切らなければならないのかという理由が伝わらないまま木が倒され、草花が刈られてはしないかということです。
切ったり刈ったりは一瞬でできますが元に戻すには何年もかかります。
「樹は切って育てるもの。」なのでしょうが、レンジャーとしてはその理由をしっかりと参加者の人達に説明できなければならないと思います。
園地の自然を利用するだけではなく保全や保護することも大事かと思います。
このようなイベントも企画できたらいいなと、勝手ながら思っております。

13期レンジャー　稲山　耕史

僕がパークレンジャーを半年やって思うことは、自分自身にとても勉強になっているということです。自分は一番年下なので、年上の方々の考えやプログラムなど勉強になることばかりです。この身につけたことはこれからも自分の力にしたいと思っています。そして忘れてはいけないのがこどもキャンプで、リーダーをしたのですが、こども以上に自分も楽しんでいたぐらいでした。こども達はとても純粋で本当に楽しかったです。これからはこの半年以上にレンジャー活動に参加していけたらいいなと思っているのでよろしくお願いします。

玉田真也

件名：　三島です

私は 幼少よりスポーツを通して さまざまな事を勉強してきました。特に 礼儀と 人とコミュニケーションをとる能力は自身あると自負 しています。そして、今も 継続して勉強しています。　あと、最近 小学校に行き 環境教育をしています。小学生へ 伝える難しさ、楽しいさを 学び 日々 成長している段階です。向上心 を持ち 色々吸収したいと 思いますので 色々 皆さん教えて下さい！

１３期レンジャー　折原

ORI☆CHANNEL

みなさん、こんにちは。幽霊部員（レンジャー？）の折原です。わたしがパークレンジャーに入って半年が過ぎてしまいました。月日は早いですね。。。ＩＰＷＳを書くのも始めてなので、せっかくだし自己紹介をさせてもらおうと思います☆☆

名前：折原　加奈　　キャンプネーム：茶々丸（ちゃちゃまる）
職業：専門学校２年生　学校では、生物・自然や環境教育の勉強をしています
所属：北部班　　自宅：大阪府吹田市　万博公園の近くです

将来の野望：したいことはいろいろあります　…しかし、努力が追いつかない
子どもを対象にした環境教育・アクティビティーのプロ
博物館やネイチャーセンター・ビジターセンターのようなところの解説員
地域の特徴を話すことができるインタープリター
どっかのんびりしたところでお店のマスター　　旅人
…究極目標は、『立派な人間』です

パークレンジャー以外の活動：神戸の自然学校のボランティア
最近の行動：夏は、キャンプをたくさんやりました
今度、チャリで琵琶湖を見てきます
最近気になること：もうすぐお月見！！（現在 2005.9.17.）
毎年、自宅のベランダで酒飲みながら、飼い猫と一緒に月見てます
星の勉強をしたい　…まだ思っているだけで実行に移せてません
やっぱり就職！！！（そりゃそうだ）
何かよい情報がありましたら教えて下さい！！

E-meal：361x.in-the-blue-sky@ezweb.ne.jp

プログラムで一緒になったときは、ぜひよろしくおねがいします☆☆

パンダ

小熊猫

～レッサー～

大熊猫

～ジャイアント～

2006年に向けて

13期レンジャー　北部班　高井　由寿

ほたるキャンプと、こどもキャンプに向けて、お父さんやお母さん、そしてこどもたちに紹介するために、「自分の似ている動物」を書かなければならなかった。困った質問だと思った。そこで思いついたのがパンダだ。顔が似ているわけではないけど、ふと、思い出したのだ。

とある文献によれば、パンダとは、現存種のジャイアント・パンダとレッサー・パンダの総称で、アライグマ科とクマ科の双方の特徴を持つ原始的な哺乳類だそうだ。平均寿命は20年。目の上には6本のまつげがある。学名は、アイルロポーダ・メラノレウカ。中国語では、パンダは"熊猫"。ちょうど秋に、体重100kgを超える母親が出産する。クマみたいに冬眠することはない。

動物園に行けば、みんなパンダばっかり撮っている。人間のような分厚い手、白い指（爪？）、笹の食べ方、白に見えるのに実は汚れて黄色くなってる毛や、もじゃもじゃのしっぽ。リアルなパンダは、背を向けていてもにんげんくさくて、詫び錆びを感じる雰囲気とか、永遠の人気を誇るパンダグッズやアドベンチャーワールドの広告写真からあまりにもかけ離れていて、なんだかとてもへんてこに見えた。ほんとうに世界の人気者？　どうも、私にはそう見えなかった。

といいながらも相変わらず、どうも気になって大阪市立科学館のオムニマックスシアター〈パンダのアドベンチャー〉を見に行ったところ、人工繁殖のパンダのセンターが実際に中国に存在し、主人公が生まれて間もない小パンダたちと遊ぶシーンを目撃してしまった。

2006年はぜひ、パンダに触れる年にしたいものだ。

ZOOMANIA

10期　おくだこーじ（くまさん）

今夏8月、北海道旭川市にある旭山動物園へ行ってきた。数年前から「行動展示」をテーマに打ち出し、昨年の夏には東京の上野動物園を上廻って、入場者日本一になり大変な話題となった、今、まさに筍の動物園である。単純に入場者が上廻った、と書くとあまり大したことがないように思えるが、人口1200万の大都市東京にある日本一の動物園を、人口36万人の中都市旭川にある特別にカネをかけた施設があるわけでもないし、特別に人気がある動物種がいるわけでもない市立の動物園が、超えてしまったのである。今書店の動物コーナーを覗くと、旭山動物園関係の書籍がたくさんならび、インターネットの検索でも、とんでもない数がヒットする。

僕は子供の頃から、動物園が大好きだった。生まれ育ちが天王寺の下町で、高度成長期の真っ只中、毎日のように光化学スモッグが発令され、周りに自然なんてどこにもないような悪環境で幼少時代を過ごしてきた僕にとっては、まさに天王寺動物園という場所は、楽しくて、楽しくてたまらない場所だった。（当時の大阪市内中心部は悪環境が避けられたのか、人口は減る一方で、僕らのような当時の小学生にとっては、夏休みや春休みが終わる度に、級友たちが郊外の新興住宅地へ転居・転校していく寂しさをみんな体験しているのだ。）とりわけ悪ガキ仲間で動物園の塀をこっそり破壊し、5時閉園後に忍び込んで、色々な動物にえさをやったり、驚かしたりしたことを今もよく覚えている。（閉園後の世界は僕らの方が見られている存在だったのかもしれないが。）その壊した塀は内からも外からも樹木の陰になっている場所で、当時は小学生も入園料が有料だったこともあって、僕らだけが知っている秘密の出入り口で、昼間もそこから自由に出入りしていた。（時効なので許してください・・・。）僕にとってはそんな夢がたくさん詰まった「スタンド・バイ・ミー」の世界が天王寺動物園だったのだ。

話をもとに戻すが、旭山動物園の他の動物園との違いは、「行動展示」にある。たとえばオランウータンが17メートルもの高さがある鉄柱に張り付けられたロープを伝ってゆくさまは、見ている人たちから、思わず拍手が飛び出すくらい、「わーっ！」と思うのだが、実はオランウータンにとっては、ごく自然なことで、他の動物園のように時々檻にぶら下がる程度で、地べたに降りてくるなどということでは、自然界ではありえないことだ。つまり、旭山動物園は動物たちのの自然な行動を見せようとしているだけでしかないのだ。でも僕たち人間にとっては、それがとてもすごいことのように思える。また飼育係の人が自ら一定の時間になると給餌をしながら、動物の生態についての解説をやさしく行なう。これもあまり日本の公立動物園ではなかった風景だと思う。パンダもいない、珍獣もいるわけではない、変わった動物がいるわけでもない、そして潤沢な資金があるわけでもない旭山動物園での見せ方は、僕たちパークレンジャーが自然をどう紹介していくのかという、ひとつのモデルケースになるように思えた。

天王寺動物園も数年前から「環境展示」に力をいれている。より自然に近い環境のもとにおいた動物を見せようとしている。また解説・案内にも大変に力を入れている。鳥のゲージの中に人が入れるようになったのは、旭山より天王寺の方がずっと前だし、天王寺動物園だって負けていない！最近近くの動物園に行ってない・・、久々に天王寺、王子、岡崎・・動物園をじっくり廻ってみるか。

編集後記

涼しくなってきた今日この頃
私は鼻とのどの調子がおかしい。これが秋風邪？でなる。
by きんちゃん

あーっしんどい！
こんないい季節にお仕事に追いまくられ、ほとんど園地に行けません。
でも、たくさんの方が原稿を書いてくれたので、嬉しいです。
Thank you very much　なかじい

仲秋の名月を過ぎても蒸し暑い日々が続いています。
虫の声は涼やかなんだけどねー。
今夜も暑いです。
にしで

２００５．９．２２　発行